

中大径トドマツを製材する ～ 製材歩留まり60%を目標として ～

谷口木材株式会社 谷口 栄二



はじめに

森林面積が町面積の85%を占める上川北部の町、美深町。「美深町のあゆみ」によると、1913年に北海道木材株式会社美深工場が操業を開始しています。その後、林業・木材産業は盛衰を経て、現在、町内で製材工場を営んでいるのは谷口木材（株）一社となっています。径が24cm以上の中大径トドマツを中心に建築用材を製材している谷口木材（株）を訪ね、谷口社長のお話を伺いました。

■会社の概要について

当社は、1946年に造材事業を、1954年に製材事業を始めました。現在の事業内容の内訳は、製材4割、造材3割、造林2割、森林土木1割となります。

美深町の森林面積の約9割は道有林で（表1）、当社が挽いている製材原木は、一部を除きほぼ全量を道有林から得ています。

表1 美深町の森林の概要

	面積 (ha)	蓄積 (千 m ³)		
		計	針葉樹	広葉樹
国有林	1	0	0	
道有林	51,662	5,971	2,697	3,275
町有林	1,002	110	62	48
私有林等	5,040	608	386	222
計	57,705	6,689	3,145	3,545

令和元年度（2019年度）北海道林業統計

かつて、住宅の柱・梁にはエゾマツが主に使われており、当社も道有林から出材される天然林エゾマツを中心に挽いていました。中でも仁宇布地区の天然林エゾマツは大径で、目が詰まり、欠点の少ないことから、ひとつのブランドになっていました。

現在、当社で扱う原木の主体は人工林トドマツに代わっていますが、道有林材を用いていることには変わりはありません。製材工場で使用しているのは、半数強が自社で造材した原木、半数弱はつき合いのある企業

から入れている原木です。

なお、エゾマツ製材の注文も少ないながらも続いているので、年間で100m³程度をつき合いのある企業から天然林エゾマツを入れています。天然林エゾマツから挽いた製材は品質が良いことから、人工林トドマツと天然林エゾマツの原木仕入れ価格には若干の差をつけています。

■原木について

トドマツ人工林の大径材は腐朽等によって品質が落ちていることが少なくありません。皆伐材の場合、造材した材の半数が製材原木には不適なため、チップ用に向けることがあります。ブル集材が導入されて林業の効率は上がりましたが、作業時に根や幹を傷め、そこから腐朽が入ったのが要因のひとつだろうと思っています。当社の造材部門においても先代の時代にブル集材を導入しましたが、導入当時、現在の姿を予測することは難しかったと思います。そして、このことは他の事業体でも同様ではないかと思っています。これからは、30年、40年後の主伐に向けた除伐、間伐といった人工林の手入れに際しては、現在の人工林の原状を省みながら作業を行う必要があるのだろうと考えています。

■製材について

当社の製材工場で製材するのは径が24cm以上の原木で、70cmでも可能です。最近では76cmのエゾマツを製材しました。原木の質の問題を別にすれば、ある程度大径材の方が歩留まりは上がります。当社の場合、大径材だから困る、大径が多くなると困る、ということはありません。そもそも、大径材が増えている、という実感はありません。

ただ、実際には先ほど述べたように原状の大径材は質の低いものが多いので欠点を避ける手間が増えます。そのことを併せて考えると径が32ccm程度の原木であれば製材効率が良くなります（写真1）。

山は主伐期を迎えているので今後皆伐材が多くな

り、その材には欠点を持っているものが多く含まれています。ですから、仕分けしながら使っていくしかありません。当社で造材する原木は、先ず製材用と原料材用に分け、さらに山土場でA材、B材に分けています。そして、製材工場にはA材を持って来ています。このような造材、山土場そして製材工場をつなぐ仕分けの仕組みを持って効率化することで、会社全体で一定の利益を確保しています。

原木の状態を見て、欠点を避けながら丁寧に製材する一このことにより、製材歩留まりはおおむね60%程度になっています。

生産している製材品は発注を受けた建築材にほぼ限られています。ただ、まれに集成材ラミナを頼まれて挽くことがあります。建築材としては、割り物が多くを占めており、角材、梁材は集成材が一般的になっているため注文は多くはありません。主な出荷先は流通事業者で、地元の工務店以外への直接販売はありません。また、札幌地区が6割程度を占めていて、それ以外では稚内、美深、名寄など地元が主です。



写真1 径30～40cmの原木が多く積まれた製材土場

■地域の製材工場として

2021年4月、仁宇布に森林認証材を用いた小中学校が建ちました（編集部注：ウッドイエジ2021年9月号「美深育ちの木々に包まれた温もりのある学び舎」）。この学校に使用した美深町内の認証材は全て当社で製材しています（写真2）。

地域材を育て、地域材を造材し、地域材を製材し、全国初のSGECプロジェクトCoC全体認証取得に貢献できたこと、そして全国から集まる子ども達に森や木材に親しむ機会を提供できたこと、このことをうれしく思っています。

また、工場の規模は小さくなくても、設備が最新のものではなくても、当社のような製材企業が存続することが地域の林業振興には欠かせないことを、このプロジェクトを通じて感じてきました。これからも、美深町に根ざす企業として、地域材にこだわった事業を進めていきたいと考えています。

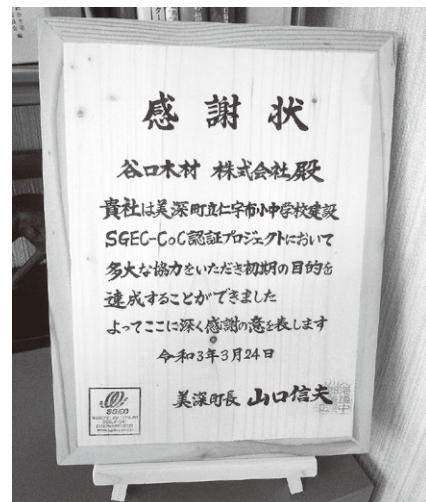


写真2 認証材活用の証しとして

（本稿は「はじめに」に記載したとおり、谷口木材株式会社・谷口社長のご説明を取りまとめたものです。また、取材に際しては当協会副会長、株式会社齊藤工業所・齊藤専務のご協力を得ました。お二人に深く感謝いたします。編集部）

参考資料

- 1) 美深町：美深町のあゆみ平成26年12月、<http://www.town.bifuka.hokkaido.jp/cms/section/soumu/qlmcaj0000003y6f-att/qlmcaj0000003ybo.pdf>.